

『成長する種』と『からし種』のたとえ

2021年12月22日

「人が地に種を蒔き、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるのであり、初めに茎、次に穂、それから穂には豊かな実ができる。」(マルコ福音書4章26節c~28節)

「それは、からし種のようなものである。地に蒔くときには、地上のどんな種より小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」(マルコ福音書4章31節~32節)

主イエスは、種に関する二つの譬えを語られた。「神の国は次のようなものである」と、神が生きて、働いておられる世界についての譬えである。「人が地に種を蒔き、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるのであり、初めに茎、次に穂、それから穂には豊かな実ができる。」人が種を蒔くと、どうしてだか分からないが、種から芽が出て、葉がしげり、茎が伸び、穂が出て、穂に実を付ける。前の「種蒔きのたとえ」は、御言葉の種がまかれる土壌が、どんな土壌であるかについての譬えであったが、「成長する種のたとえ」は、種は自ずと実を実らせていくと、種には圧倒的な命が宿っていると語られている。神の国は、神ご自身が成長させ、実りを実現していくのである。人間が何をしたか、しなかつたに関わりなく、種・神の言葉自体が、神の国を現していく。このことを信じるところに信仰が成り立つ。そして、「実が熟すと、すぐに鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」これは、終末の完成時に、神の国は豊かな実りをもって到来するという希望の言葉である。この希望があるから、今はどんなに破れていようとも、前を向いて歩けるのである。



からし種

主イエスは、「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか」と言われ、「からし種」の譬えを話された。からし種は地に蒔く時は、左の写真のように、地上のどんな種よりも小さい。直径は1mmほどで、重さは1mgくらいである。ところが、蒔かれて成長すると、どんな野菜よりも大きくなり、背丈は3mくらいになる。左の写真のような、ラッパ型の綺麗な黄色い花を咲かせる。成長したからし種の木の葉の陰には、空の鳥が巣を作って、宿るほどになる。主イエスは、神の国は、からし種のように、最初は小さいが、驚くほど大きくなると譬えられた。神の国は、御言葉が持つ愛と真実によって、限りなく成長する。

主イエスは、紀元30年頃、エルサレムで十字架刑に処せられたが、復活した。当時の世界では、エルサレムは辺鄙な片隅であったが、今や、世界のクリスチャン人口は23億人とされている。主イエスが示された神の国は、爆発的に広がった。ただ、数が増えればよいという訳ではないだろう。人間は神を都合よく利用する。主イエスの十字架と復活によって示された神の国は、人間の生の絶対的是認を互に受け入れ合う世界である。この世界の喜びを伝えるために、神の国の住人とされた人たちは、宣教の使命を負っていることを、感謝の内に覚えたい。



からし種の花

